
しょうちゃん

ハイキ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

しょうちゃん

【Nコード】

N7057N

【作者名】

ハイキ

【あらすじ】

幼い頃、ひとりの青年と出会った。「しょうちゃん」は不思議な人だ。この田舎町のことはなんでも知っていて、どこに何があるとか、ここにはどんな誰が住んでいるとか、時々含んだように悪戯っぽい笑みを浮かべながら、全部教えてくれたのだ。

小学四年生の頃まで、母の実家がある田舎町に住んでいた。

実家の近くにアパートを借りていて、そこに三人で暮らしていた。母はその土地に代々ある巫女さんの家系で一人っ子だったため、父のほうで婿入りする形でやって来たらしい。ちなみに父の仕事は文章書き。あまり大層なものではなくて、雑誌の小さな欄にひっそりと載っているような、ちよつとした仕事ばかりだった。

家族の仲はとても良かったと思う。今もそうだし、言い合いになっっているのなんて一度も見たことがない。父は少し間が抜けているけど温厚な人で、母も優しくていつも笑っている。俺は小さい頃から両親が大好きだった。

一方、俺自身はあまり愛想のいい子どもではなかった。両親にあまり大事にされていたせいか、よそに対しては恥ずかしがりで引っ込み思案で、人と接するのが苦手だった。特に同い年ぐらいの子どもからは、無口で俯いていて変な奴だと言われてばかりで、小学校に入っても、友だちらしい友だちはひとりもできなかった。ただ、誘われればついていくし文句も言わないから、いいおもちゃとしてなら、いろんなグループの遊びや探検に参加していたと思う。

ところで俺は、昔から、ふとした時にぼんやりしてしまう癖があった。母と買い物に出かけている時も、学校にいる時も、ほんとうに急にだ。無論友だち（便宜上）と遊んでいる時にも。遊びに誘ってくる友だちの中には、そんな俺を置き去りにしたりしてからかうために誘っているようなやつもいた。

ある日、たぶん二年生の夏休みだったと思う。いつものように遊びに誘われて、普段遊んでいる広場のむこうにある林までみんなで行った。リーダー格が「今日はここでかくれんぼをしよう」とか言

って、なんだかんだあつて俺が鬼になったのを覚えている。いつものことだったから、文句も言わず木に向かって、数を数える。

数え終わって顔を上げると、なんとなく違和感があった。やけに静かで、でも、いつもみたいに俺を置いてどこか別の場所に遊びに行っただろうと思った。それから、せつかくだしひとりで探検でもしてみようと思い立って、林の中に歩いて行っただ。

木がまばらでそれほど生い茂っていない林だったせいか、奥まで行ってもずっと明るかった。俺はなんだかわけもなく楽しくて、どんどん奥まで行って、もう何時間も歩いていたら陽も傾いてくるだろうに。その時はずっと、昼の高い位置にあるままだった。

道中で拾った木の枝を振り回したりしながら歩いたりして、そろそろ喉が渴いたなあとか考えていたら、不意にひらけた場所に出た。そこには古くて立派な日本家屋があつて、縁側に誰かが座って涼んでいる。横にはお盆にのったお茶とお菓子が置いてあつて、近づいてみるとその人もこちらに気付いて手招きをしてきた。

「なまえはなんて言うの、どこから来たの」とか聞かれたと思う。俺はその人のことを「しょうちゃん」みたいな感じで呼んでいた。お茶とお菓子が今まで食べたことのない美味しい味がして食べるのに夢中だったから、会話の内容はあんまり覚えていない。しょうちゃんはい髪をした男の人で、多分、大学生ぐらいの年齢だった。立派な日本家屋にひとりて若い男がついていう時点で充分おかしいことだが、子どもだったし、なんの疑問も抱くことはなかった。しょうちゃんは博識で、林の中を一緒に歩きながら色んな話を聞いた。普段は引っ込み思案の俺がこんなにもすぐ打ち解けて仲良くなれるなんて、とても珍しいことだ。

それから言うもの、俺は友だちの誘いを全部断って、毎日しょうちゃんのところへ遊びに行くようになった。しょうちゃんはいつ

も、あの美味しいお茶とお菓子を用意して待っていて、行くと色々な面白い話を聞かせてくれたり、辺りを一緒に散歩したりした。そして家につくころには夕方になっていて、また明日と言われて別れる。

夏休み中そうやって過ごして、学校が始まってからも、放課後や休みの日は必ず遊びに行った。他の友だちと一緒に遊ぶよりずっと楽しかったし、しょうちゃんも、俺が来るといつも喜んでくれたからだ。

しょうちゃんと一緒に歩いたり遊びに行ったりする範囲はどんどん広がっていった。最初は、ずっとあの家にひとりでいたのかと思っていたが、どうやら違うらしい。この田舎町のことはなんでも知っていて、どこに何があるとか、ここにはどんな誰が住んでいるとか、時々含んだように悪戯っぽい笑みを浮かべながら、全部教えてくれたのだ。俺もしょうちゃんになら何でも話した。親に言いにくい子供の隠し事や、学校であったこと、来る途中で見たもの、俺が俺のことを話す時、しょうちゃんはじっとこちらを見て、興味津々で聞いてくれていた。特に、学校のことにはとても興味があるみたいだったから、何度か学校の前まで連れて行ったこともある。

そのうち、四年生に上がる頃になると、しょうちゃん自ら俺の登下校についてくるようになった。朝は家の前で待っていて、下校する頃になると校門の前で待っている。誰も気にしていないみたいだったから俺も気にしないことにして、そんなことより、いつでも楽しい話をしながら登下校するのが楽しくて仕方がなかった。母は俺が前より明るくなったのに気付いて、とても嬉しそうにしていたのを覚えている。俺自身も、その頃はひとりでぼんやりすることが少なくなっただような気がしていた。

それから半年も経たない内に、家の都合で転校することが決まった。親戚の家に巫女さんを継げる人ができたから、県外に行っても良いことになったのだ。前々から引越すかも知れないと両親から

聞かされていたし、俺も学校には友だちがいないのでいつでもいいと言っていた。けどしようちゃんはどうなるんだろうか。県外では毎日のように会いに行けなくなるだろうし、ちゃんと知らせなければいけない。

しかし、そのことを伝えようとした日に限って、朝も帰りもしようちゃんの姿が見えない。家に戻ってみてもいない。俺は母に事情を話して（この時初めて人にしようちゃんのことを明かしたが、母は家柄もあってか少しも訝しがったりしなかった）、母とふたりで手土産を持って話をしに行くことにした。

薄暗くなっていく中、急ぎ足で林の中を進む。

やっと林を抜けた時、啞然とした。林の中のひらけた場所に、しようちゃんの家があるはずだ。でもそこにあっただのは、小さな石碑だけ。場所を間違えたんじゃないか？でも、何度も通った道だ。ありえない。混乱して母の顔を見上げると、母は困ったように笑って俺を見た。本当に、ここにあったんだ！信じてもらえないんじゃないかと思っただけに弁解しようとしていると、母が石碑のところまで行って「息子がお世話になりました」みたいなことを言いながら、持ってきた手土産をその石碑の前に置いた。不思議に思っただけだが、その日はそのまま連れられて家に帰った。

間もなく俺は、両親に連れられて少し都会のほうへ移り住んだ。転入先の学校では少ないながらもそれなりに友だちができて、しようちゃんのこともしょつと忘れていった。

それから何年も経ってつい最近、ふとしたきっかけでしょうちゃんのことを思い出した。

俺は小学校を卒業してからも平凡に育って、大学に行って、親元を離れて、職について、結婚して子ども産まれた。妻とは些細なすれ違いで離婚して、小学二年生になる息子とふたりで暮らし始めた頃のことだ。息子はよく外で遊ぶ活発な子供だったが、時々学校の帰りなんか不思議な絵を描いてみせる。それは白っぽい猫の絵で、息子はその猫を「しょうちゃん」と呼んで俺に見せた。最初こそ、なにかひっかかるようなものがある感じがしてただで、近所の猫だろうかと思っていた。しかし、何度かその絵を見て記憶を辿るうちに、やっと思い出したのだ。

急いで実家の母に電話をした。「しょうちゃん」とは一体何だったのか。どうして何も知らないはずの息子が知っているのか。なぜ今まで俺は、こんなことを忘れていたのか。

聞いた話によると、あの石碑は魂をまもる神さまの家として祀っているものだったらしい。魂という言葉は生き物の知性なんかも指していて、地元では「博学多識で聡明な神さま」として伝えられているんだとか。とにかく、それが「しょうちゃん」の本当の姿なんだと。

そしてしょうちゃんの一片が俺の魂に（まるで守護霊のように）憑いてきて、血の繋がっている息子にはそれが見えるんじゃないか。というようなことを母は言っていた。

確かにあの時以来、子供心にあつたなにか不安なものがすっかり無くなって、軽やかだったような気がするし、実はずっと近くにいたというのは、納得できる話だった。（でなければ結婚して子どもができるなんてのも、奇跡に近かったと思う。生憎考えの違いから離婚してしまったが）

近い機会に、息子を連れて母の実家のほうへ行ってみようと思っている。あの林の中を歩いて、小さな石碑の前にお供え物をしに行く。そして、息子ともどうか仲良くやってくれと言うつもりだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7057n/>

しょうちゃん

2010年10月10日06時40分発行